

## 「私は今ここにいる」の正しさ

山田浩司  
日本大学

本発表では、カプラン流の指標詞の意味論について考察する。特に、カプランの指標詞の意味論に基づいて、単称命題を介してコミュニケーションが成立するような理論が可能かどうかを検討する。

カプランは、意味というものを、意味性格と内容という2つの側面に分析して、指標詞の意味論の考察を行った。私が友人に向かって、水族館で、サメを指して、「おれ、あれ、好きなんだよね。」と言ったとする。又、太郎君が花子さんに向かって、美術館で、ある絵を指して、「おれ、あれ、好きなんだよね。」と言ったとする。この2つの発話は、違う人が違うものを指して違う場所で違う時に行われているので、違うことを言っていると言える。この違うことを言っていると言う場合の意味が内容である。また、どちらも、「発話者が、指をさした先にある少し遠いものについて好きと言っている」という同じ意味を持っているとも言える。この同じ意味と言われるものが意味性格である。

内容は、フレーゲの思想、ストローソンの言明、ラッセルの命題にあたるものであり、真偽が評価される対象である。カプランの理論では、この内容は、単称命題である。つまり、命題に、「おれ」や「あれ」に対応するものそのものが出てくる。この路線で考えると、私と友人は、「おれ、あれ、好きなんだよね。」という発話に対応する単称命題を共有することで、コミュニケーションがとれていることになる。しかし、私は目が悪く、「あれ」をシャチのマー君だと思って指しており、「シャチのマー君が好きだ」ということを言いたかったのだが、本当は、サメのジョーズ君であり、友人は目がよく、あれがサメのジョーズ君であることを知っており、私が、「サメのジョーズ君が好きだ」と言ったのだと解釈するような場合が考えられる。カプランも指摘することであるが、発話者が、「あれ」で意図する対象と、聞き手が、「あれ」によって解釈する対象は異なりうる。カプランの理論では、それらの対象が同一になる保証はないように思われる。つまり、「おれ、あれ、好きなんだよね。」という発話で、発話者が意図した単称命題と、聞き手が解釈した単称命題は異なりうる。つまり、内容が共有されているという保証がない。

指標詞の意味論においては、①指標詞が指しているものが何であるかを知らなくても、②発話者と聞き手が意味を共有しコミュニケーションがとれる、ということが特徴的な点であり、必要な点だと考える。①については、まだ、説明していなかったが、例えば、水族館で、私と友人のそばで、女の子が、「私、今、すごく寒い」と言った場合を考えればよい。私も、友人も、その女の子が誰で、今がいつかわからなくても、その女の子が言ったことを理解できる。

カプランのように、内容として単称命題を採用して、この 2 つの特徴を満たす指標詞の意味の理論を構築できるかどうかを検討し、そのような意味の理論ができるようにカプランの理論を補足、修正することを試みる。